

この家には
わたしたち
がすんでいる



清原雅 監督作品

わたしたちの家

第68回ベルリン国際映画祭
フォーラム部門正式出品

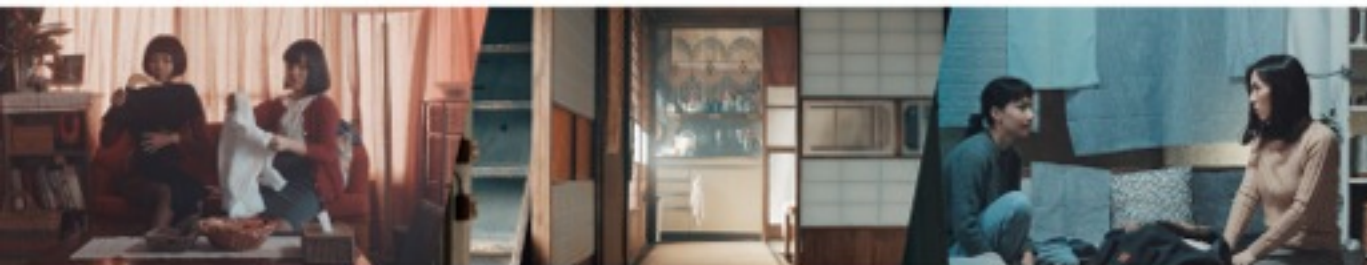
PFIアワード2017グランプリ受賞
PFI Other-Festival Award 2017 Grand Prix

河西和香 安野由記子 大沢まりを 藤原芽生 菊沢得憲

脚本：津原真 監修：三浦大知 | プロデュース：津原真太郎 佐野大 | 撮影：宇田謙太 | 美術：藤原和希 | 美術：加藤雅子 | 衣装：野木知津
サウンドデザイン：伊藤健隆 三好崇介 | 編集：Kazuyuki Jeyhan | 助監督：藤原美千 山本真 川上知史 | 音楽：松本浩一
宣伝：松本浩一 | 配給：HEADZ <http://www.headz.co.jp/film.html>

2017年/10月/アメリカンビスタ/Liich/カラー/DCP
東京芸術大学大学院映画研究科映画専攻卒業作品
©東京芸術大学大学院映画研究科

黒沢清監督絶賛! 突然変異的に現れた天才映画作家による清新で鮮烈なる劇場デビュー作
父親を失った少女と、記憶を失った女性の、まったく別々の物語が、ひとつの「家」の中で交錯する



この家には「わたしたち」がすんでいる。

セリはもうすぐ14歳。父親が失踪して以来、母親の桐子と二人暮らし。最近、お母さんに新しい恋人ができて複雑な気持ちになっている。さなは目覚めるとフェリーに乗っており、自分にかんする記憶がなくなっていた。彼女は船内で出会った女性、透子の家に住まわせてもらうことになる。

セリとさなのストーリーは線路を持たないまま、一軒の同じ「家」の中で進行する。これはいったいどういうことなのか? 映画史上、誰一人として思い浮かばなかった、特異で甘美な室内劇。壁に落ちた形而上的スリラーであり、切実でピュアな青春映画であり、女同士の恋愛の映画であり、ユニーク極まる恋愛映画でもある、類い稀なる魅力を持つ作品。監督の高橋氏は東京藝術大学大学院で黒沢清、諏訪敦彦両監督に師事、本作は同僚了作品である。本作によってPFFアワード2017グランプリを受賞した。2018年2月開催の第68回ベルリン国際映画祭フォーラム部門への正式出品が決定している。

一方が現実なら、もう一方はマボロシで、そっちが現在なら、あちらは過去だということになるのだが、いやいや」とすると全員が幽霊!?
一軒の日本家屋を舞台にして、目もくらむような物語の迷宮が展開される。まるでヨーロッパの前衛小説を読んでいるようだ。

黒沢清 (映画監督)

「わたしたちの家」は、言葉と映像と音の張り結んだ連鎖と交錯で、わたしたちを、どこでもないどこかへ連れ出してくれる。そのどこかは、この作品を見た人の数だけある気がする。でも、見ないとわからない。

瀬田なつき (映画監督)



1+1が2になるのではなく、互いに依存することも苛慕することもなく、ただ1と1としてあることで世界を隔いてゆく。その「開かれ」に風が吹き込むとき、ふたつの淡い物語の旋律はやがてひとつの響きとなって、世界をみずみずしく息づかせるのだ。

諏訪敦彦 (映画監督)

清原信監督は「それ」にかたちをあたえず映画にした。「それ」は「それ」としか言えないからこそ「それ」であり続けることができる。名付けられる前の風景が「わたしたちの家」だ。

山下澄人 (小説家)

女たちはこの家では何度でも出会うことができる。見えるものと見えないもの。そこにいる人といない人のあいだに、この映画は誘い出してくれる。これから出会うかもしれないわたしたちに、その場所を聞いてくれる。

柴崎友香 (小説家)

清々しい傑作。

一見して平凡な日常に穿たれた穴を少女たちはいとも簡単に発見し、どこでもない場所へ軽々とすり抜けてゆく。この少女たちがどこへ行くのか、まったく予想がつかない。サスペンス映画の最良の伝統を想起させつつ、「レベッカ」、『セリーヌとジュリーは舟で打く』、『マルセル・ドリュア』等々……。よく見ればどれも似ておらず、捕らわれていない。この映画を見て、自分までとても身軽になった気がした。

三浦哲哉 (映画評論/研究)

公開前夜祭
『わたしたちの家』はわたしたちの映画である!

2018年1月12日(金) 渋谷7th FLOOR
LIVE: 杉本佳一、東京塩梅、よだまりえ DJ: 清原信
開場 18:30 / 開演 19:00 予約 2,300円 / 当日 2,500円 (+3000円 order)
<http://7th-floor.net/schedule/view/2575>



2017年/第68回/アメリカン・カンピオナ/5.3d/カラー/DCP
東京藝術大学大学院映像研究科卒業生が監督した作品

出演: 河野和香 安部由紀子 大沢まり子 藤原芽生 高杉真澄 志原利雄 志田明花音
北村海海 平川唯佳 大石真由 小松美 伊予 秋見優 タカマツマハ
監修: 清原信 | 脚本: 清原信 加藤法子 | プロデューサー: 池本謙太郎 佐野大 | 撮影: 千田健太
照明: 藤原和希 | 美術: 加藤智子 | 衣装: 高木悠里 サウンドデザイン: 伊藤孝典 三好忠介
編集: Karthika Jayalak | 助監督: 廣田裕平 山本真 (以上編集) 音楽: 杉本佳一
宣伝: 社々本報部 | 配給: H E A D Z <http://www.fadedbyhead.com/ourhouse.html>



館屋法水 (劇作家)

この映画には、家には、二つが住んでいて、どちらも表でも裏でもなく、どちらも主でも副でもなく、映画の原理と、人生の原理が住んでいて、私の映画、が見ることで生きていたので、私は映画、を見ながら暮らした。

2018年1月13日(土)より

ユロスペース
EUROSPACE

東京都渋谷区円山町1-5
TEL: 03-3461-0211
www.eurospace.co.jp

ほか全国順次公開!
特別上映、トークイベント等あり。詳細はHPで。
<http://www.fadedbyhead.com/ourhouse.html>